

ホオズキ「佐賀H5号」および「佐賀H6号」の栽培特性					
[要約] ホオズキ品種「佐賀H5号」および「佐賀H6号」は、増肥条件下で栽培しても、 <u>宿存がくの着生数減少や着色遅延</u> が起こりにくい。また、「佐賀H5号」は、 <u>密植しても宿存がくの着生への影響は小さい</u> が、「佐賀H6号」は、密植すると、 <u>宿存がくの着生数が減少する</u> 。					
佐賀県農業試験研究センター 野菜・花き部・花き研究担当			連絡先	0952-45-2143 <a href="mailto:nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp">nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp</a>	
部会名	花き	専門	栽培	対象	ホオズキ

## [背景・ねらい]

ホオズキは、県内の様々な地域で栽培されている主要な特産花きの一つである。当センターでは、これまでに、宿存がくの連続着生および着色が優れる「佐賀H5号」および「佐賀H6号」を育成した。一般的なホオズキの品種は、増収効果が高い増肥や密植によって、宿存がくの着生数減少や着色遅延につながるが、育成した2品種は、宿存がくの着生や着色が格段に優れるため、増肥や密植による宿存がくの着生や着色に及ぼす影響について検討し、画期的な増収技術を開発する。

## [成果の内容]

1. 「佐賀H5号」および「佐賀H6号」は、増肥条件下で、切り枝長や節数に差はみられない。また、宿存がくの着生数減少や着色遅延は起こりにくい(表1)。
2. 「佐賀H5号」は、密植しても、慣行と同程度の切り枝長と節数であり、宿存がくの着生数減少や着色遅延も起こりにくい(表2、図1)。
3. 「佐賀H6号」は、密植すると、節間長が長くなる。また、着花はするものの生理落果が多く、宿存がくの着生数および着色した宿存がくの着生数が減少する(表2、図1)。

## [成果の活用面・留意点]

1. 増肥の基肥窒素施用量は 23kg/10a、慣行の基肥窒素施用量は 15kg/10a とした。なお、2014年は根域制限栽培、2015年は地床栽培による試験結果である。
2. 密植の栽植本数は 16,000本/10a、慣行の栽植本数は 8,000本/10a とした。
3. 密植の畦内部の株において、宿存がくの着生数減少や着色遅延が著しかったことから、日照条件の悪化が要因と考えられる。
4. 本試験は、センター内圃場の土壌(灰色低地土)で栽培した場合の試験結果である。

[ 具体的なデータ ]

表1 増肥が収穫時の切り枝長、節数、宿存がく着生数に及ぼす影響

試験年	施肥量 <sup>z</sup>	佐賀H5号			佐賀H6号			
		切り枝長 (cm)	節数 (節)	宿存がく着生数 <sup>y</sup>	切り枝長 (cm)	節数 (節)	宿存がく着生数	
2014	増肥	82.6	19.0	13.9 ± 0.9 ( 7.8 ± 1.1)	79.4	20.0	7.8 ± 1.1 ( 5.6 ± 0.8)	
	慣行	89.9	19.9	12.5 ± 0.3 ( 8.3 ± 0.3)	76.4	19.9	9.3 ± 0.9 ( 6.1 ± 1.0)	
2015	増肥	122.3	24.2	14.7 ± 1.8 (11.6 ± 1.1)	129.9	25.0	13.7 ± 2.5 ( 9.9 ± 2.8)	
	慣行	139.7	25.7	18.6 ± 1.9 (13.7 ± 0.3)	131.1	26.3	15.6 ± 1.0 (12.6 ± 1.8)	
試験年		** <sup>x</sup>	**	n.s.	**	**	**	*
施肥量		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
試験年×施肥量		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

<sup>z</sup>増肥の基肥窒素施用量は23kg/10a、慣行の基肥窒素施用量は15kg/10a

<sup>y</sup>( )内の数値は着色した宿存がく着生数、±の後の数値は標準誤差

<sup>x</sup>分散分析により、\*\*は1%水準で有意差あり、\*は5%水準で有意差あり、n.s.は有意差なし

表2 栽植密度が収穫時の切り枝長および節数に及ぼす影響

栽植密度 <sup>z</sup>	佐賀H5号		佐賀H6号	
	切り枝長 (cm)	節数	切り枝長 (cm)	節数
密植	138.7	22.8	137.5	23.9
慣行	135.2	25.4	137.2	27.3
有意性	n.s. <sup>y</sup>	n.s.	n.s.	*

<sup>z</sup>密植の栽植本数は16,000本/10a、慣行の栽植本数は8,000本/10a

<sup>y</sup>t検定により、\*は5%水準で有意差あり、n.s.は有意差なし

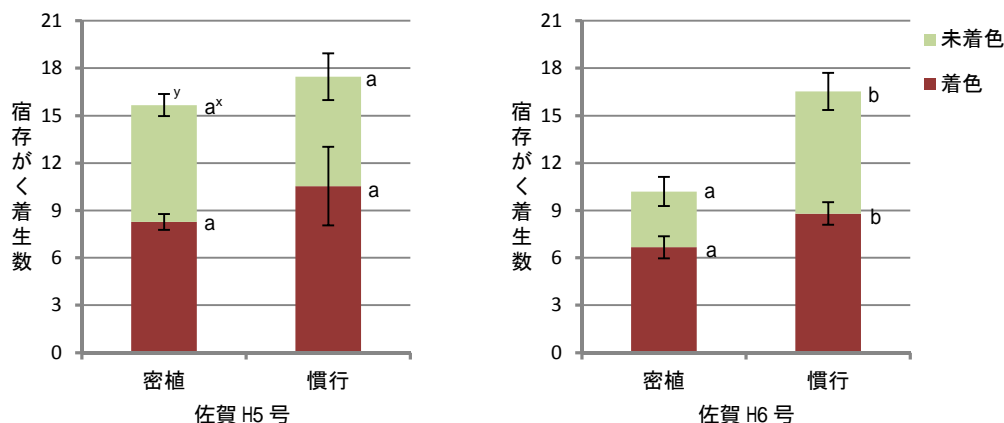


図1 栽植密度<sup>z</sup>の違いが収穫時の宿存がく着生数および着色に及ぼす影響

<sup>z</sup>密植の栽植本数は16,000本/10a、慣行の栽植本数は8,000本/10a

<sup>y</sup>標準誤差

<sup>t</sup>t検定により、異符号間に5%水準で有意差あり

【耕種概要】	2014年度	コンテナ(40*60*25cm)を用いた根域制限栽培 地下茎定植:2月27日、収穫時調査:7月29日 着色促進処理:エスレル10散布無し 栽植本数:4本/コンテナ
	2015年度	地床栽培 地下茎定植:3月11日、収穫時調査:7月28日 着色促進処理:エスレル10 800倍液を7月7日に茎葉散布 栽植本数:約8,000本/10a(慣行)、基肥窒素施用量:15kg/10a(慣行)
	※訪花昆虫無し、防虫網有りハウス	

[ その他 ]

研究課題名: 佐賀オリジナルブランドを創出する地域特産花き類の新品種開発

予算区分: 県単

研究期間: 平成26年~27年度

研究担当者: 高取由佳、坂本健一郎、松村司、千綿龍志、月足公男